Japan Epilepsy Society

B-23 側頭葉てんかん患者の記憶・認知機能とIMP-SPECT所見

福島県立医科大学医学部神経精神科

管　るみ子、上島雅彦、上野卓弥、宮本百合子、
丸　浩明、菊地百合子、渡部　学、丹羽真一

SPECT検査上の低血流域は認知や記憶の機能に影響を与える可能性がある。我々は第29・30・31回の本学会で側頭葉てんかん患者の記憶や認知機能とIMP-SPECT所見の比較検討結果を報告してきたが、個々の検査ごとの検討にすぎず、総合的な検討はなされてこなかった。今回我々は側頭葉てんかん患者において記憶（視覚・言語）や前頭葉機能のうちIMP-SPECT所見が最も反映するのはどの機能かを探るべく、総合的に検討したので報告する。＜対象と方法＞症例は当科外来通院中の側頭葉てんかん患者54名で、性別は男性33例、女性21例で、平均年齢33.5±12.9歳であった。これらの症例においてベントン視覚記銘検査・ウェクスラー記銘検査・ウィスコンシン・カード・ソーティングテストを施行した。罹病期間の平均は16.2±11.4年、複雑部分発作の月平均発作回数は2.1±2.7回であった。IMP-SPECT検査結果は基底核を通るスライス面における左右の前頭葉、側頭葉、後頭葉のROI値を計算した。左のROI値から右のROI値を引き、左右のROI値の和で除したものをLaterality Index（LI）とし、この数値が正の場合を右低血流群、負の場合を左低血流群とした。このLIと各記憶と認知の検査成績の相関をみた。有意水準は危険率0.01とした。＜結果＞1. ベントン視覚記銘検査では右側頭葉低血流群（N＝23）においてLIと保続・左側の誤答数に正の相関を認めた（$r=0.53, p<0.01$, $r=0.54, p<0.001$）。また、右後頭葉低血流群（N＝30）においてLIと左側の誤答数に正の相関を認めた（$r=0.46, p<0.01$）。2. ウェクスラー記銘検査項目では有意の相関をみとめなかった。3. ウィスコンシン・カード・ソーティングテストの検査項目においても有意の相関をみとめなかった。＜まとめ＞総合的に検討した結果、SPECT検査上の低血流域が影響を与える場合、視覚記憶が最も影響をうけやすいことが考えられる。

B-24 後天性てんかん失語における脳波および神経学的検討

岡山大学医学部小児神経科

服部旬里、浅野　孝、荻野竜也、大塚頌子、
岡　鎌次

【目的】小児の後天性失語症のうち、てんかんに関連して生じるLandau-Kleffner症候群（LKS）が知られており、原因としてててんかん発射の高次脳機能への影響が推測されているが、その病態生理や神経心理学的分析は未だ不充分である。LKSの4例について検討した。
【対象と方法】LKS 4例について臨床的脳波学的検討と、失語症に関する神経心理学的検査（K-ABC、ITPA、SLTA）を行った。
【結果】てんかんの発症年齢は2歳8ヶ月～7歳4ヶ月、発作型は症例1では右顔面および全身の間代性痙攣と非定型欠神発作、症例2では全身痙攣と顔面の間代性痙攣と非定型欠神発作、症例3では全身痙攣と右上肢の間代性痙攣、症例4では半身痙攣と複雑部分発作であった。発作間欠時脳波では、症例1,2では側頭部～中心部よりてんかん発射をみとめ、症例3,4では側頭部～中心部、後側頭部を中心に多焦点からてんかん発射をみとめ、全例において脳波異常は広汎化傾向を示し、睡眠時にcontinuous spike-waves during slow wave sleepを呈した。
言語症状の発現は全例においてててんかん発作出現後で、4歳9ヶ月～9歳7ヶ月であった。症例1～3では言語表出の障害が著しく、自発語は乏しく非流暢で、抑揚障害、喚語困難、構音障害、復唱障害、錯書をみとめたが、言語理解は保たれていた。症例4でも同様に言語表出の障害をみとめたが、言語理解が不良な点が他の3例と異なっていた。また、症例1,2,4では多動を伴った。
症例1～3では、睡眠時の広汎性脳波異常の改善とともに言語症状が著しく改善し、日常生活に支障のない程度にまで回復した。一方、症例4ではてんかん発射消失後に自発語が増加したものの現在も明らかな言語障害が残存している。
【結論】一般にLKSでは運動性失語より感覚性失語を示す症例が多いといわれているが、我々の経験した症例の4例中3例では、言語理解に比べて言語表出が著しく障害されていた。

NII-Electronic Library Service